様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００２１０

研究課題名（和文）白描図像の分析から帰納する仏画研究―玄証本を起点に―

研究課題名（英文）Buddhist painting studies attributed to the analysis of Buddhist iconographic pitures involved in the priest Gensho,(Gensho-bon)

研究代表者
古川　攝一（FURUKAWA, SHOICHI）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・研究員

研究者番号：７０４６３２９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：現段階で判明する玄証本の総体をおおよそ捉えることが出来た。個々の図像を分析すると、請来図像の占める割合が多いこと、玄証本が造形化された仏画や仏像に請来図像の影響が認められる作例があることが分かった。また、白描図像の描線を考察することで、白描画だけでなく、本画である仏画ややまと絵絵巻との共通性や違いを明らかにし、作例が限られる古代・中世絵画史を補う重要な資料群となることが明らかとなった。さらに、代表者が所属する東京国立博物館に所蔵される近代の模本を活用することで、玄証本をはじめ同時代の白描図像について考察する有意義な資料群となることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで仏教絵画研究における基礎資料として活用されていた白描図像について、美術史学の方法論を用いて本画と同じように考察し、絵画史上に位置付けることを試みた点である。白描図像は断簡も含めて国内外に分蔵されており、再評価が進みその重要性が明らかとなることで、展覧会などでの積極的な公開が行われ、研究が進むことが期待される。

研究成果の概要（英文）：The Buddhist iconographic pictures which sketched in ink,(Hakubyo-Zuzo) were widely produced in the Heian period.This study focuses on the Buddhist iconographic pictures involved in the priest Gensho,(Gensho-bon). Gensho-bon consists of approximately 30 examples. This study revealed that many of Gensho-bon were copied based on the Buddhist iconographic pictures brought from China.It was found that Gensho-bon were greatly utilized in the creation of Buddhist statues and paintings. By comparing Gensho-bon with Buddhist paintings, it became clear that Gensho-bon were an important group of materials to supplement the history of Buddhist painting in the ancient and medieval periods, where examples were limited.

研究分野：美術史学

キーワード：白描図像　仏教絵画　白描画　図像学　玄証本　美術史学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

白描図像は『大正新脩大蔵経図像部』や大村西崖『仏教図像集古』（仏書刊行会、1922 年）の刊行によって戦前から基礎資料の集成が進められた。玄証及び玄証本図像についても同様で、土宜成雄『玄証阿闍梨の研究』（桑名文星堂、1943 年）にまとめられた。ただ、ここでは玄証の法脈や経歴が対象であり、個々の作例についての細かな分析はされていない。玄証本には、玄証の落款や花押、「玄証本」あるいは「月上院」という墨書が認められる。この墨書の有無が判断基準の一つとなり、近代には鑑賞価値が見出され、断簡が軸装された作例も多い。美術史学では、石田尚豊「仏画稿本（東博保管）と玄証本」（『MUSEUM』210、1968 年）において、玄証自筆図像と花押の変遷の分析が行われた。その後は、展覧会図録などで個別の作例について言及される一方、玄証本を総合的に捉えた研究はなされていない。ただ、玄証本が同時代の造像活動と密接に関わることが幾つかの事例から明らかにされている。例えば近年、奥健夫「四天王・執金剛神・深沙大将像と快慶―新出納入品の紹介を兼ねて」（特別展『高野山の名宝』図録、読売新聞大阪本社、2014 年）では、快慶作の彫刻と玄証本図像との密接な関わりが明らかにされた。こうした中、応募者は諸家に分蔵される玄証本の調査を行う過程で、白描図像の集積が、院政期から鎌倉時代の仏像・仏画の図像伝播に重要な役割を果たすことに気付いた。図像に含まれる情報を抽出し、項目毎に整理することで白描図像を横断的に捉えることが可能となり、仏像仏画研究により有効な資料群となるのではないかとの思いに至った。

一方、玄証本「十六善神図像」（東京国立博物館）に見られる、丸味のある人形のような造形の特徴が「華厳五十五所絵」（東大寺他）と類似することに気付いた。これは実任本「十二神将図像」（仁和寺）や他の白描図像にも見出すことが可能で、図像の造形が著色仏画へ影響を与えた可能性が想定される。ひいては、院政期以降に制作される白描淡彩絵巻や、肥痩のある描線で市井の人々を活写する「信貴山縁起絵巻」（朝護孫子寺）や「伴大納言絵巻」（出光美術館）といった、やまと絵絵巻との関係など、図像に見られる表現や造形に着目することで、新たな視点が広がる可能性が想定された。

２．研究の目的

本研究の目的は、以下の 3 点に集約される。

（１）白描図像解析手法の確立

白描図像は使用目的によって様々な形態があり、表現も多様である。玄証本を手始めに、他の図像にも共通する情報の収集及び分析の手法を模索し、確立する。これによって諸家に分蔵される玄証本の総体を把握し、復元的考察を行うだけでなく、断簡として流出している図像を一点でも多く位置づけることを目指す。

（２）白描図像を介した学侶、画僧、絵仏師の連携の解明

白描図像には書写年代や転写者、図像の継承者などが明示された基準作が多く遺されている。これらの情報を関連づけて考察することで、時代や地域を考慮した立体的な図像のつながりを明示出来るものと考える。

（３）院政期以降の現存する仏画作例への影響の考察

先行研究でも幾つかの作例について具体的に玄証本との関わりが論じられているが、他の図像と作例にも対象を広げ、主題（図像構成）だけでなく、表現や尊像の造形にも留意することで、白描図像と仏画制作の影響関係を総体的に把握することを目指す。

３．研究の方法

以下の手順で研究を進めた。

（１）玄証本図像の整理と分析

代表者がこれまで調査を行ったおよそ 30 件の玄証本図像について、主題（図像）、表現、付属する文字情報の三点を抽出し、分析、整理を行った。表現については、「千手観音二十八部衆図像」（東京国立博物館）のように均質で没個性的な描線で図像を描くもの、「梵天火羅九曜図」（高山寺）のように肥痩のある描線で、打ち込みや払いといった筆運びの痕跡を明瞭に残すもの、「尊星王図像」（東京国立博物館）のように弛緩した描線に加え写し崩れが認められるものに大別される。紙質と描線に着目して丹念に分析することで、玄証本図像の中で、自筆本、収集本、後世の転写本の区別が出来るものと考える。付属する文字情報については、高山寺印の有無や裏書の函番号によって、ある段階での保存状況の一端を明らかにすることが出来るものと考える。並行して諸家に分蔵される玄証本図像の調査を行っていく。こうした情報と図像の主題との相関関係や、図像そのものの特徴を抽出することで、玄証本図像の特色、ひいては高野山の図像集積の実態について明らかに出来るものと考えた。

（２）玄証本と関連する白描図像の整理と分析

第二に、玄証本で試みた図像解析の手法を、同時代の他の図像に対象を広げ、分析を行った。白描図像の基礎資料としては『大正新修大蔵経図像部』全 12 巻があるが、画像が不鮮明なものや図像に付された注まで読み取ることが出来ないものが多い。従って本研究では、国内外の美術

館・博物館といった公的機関に所蔵される図像や、東寺・醍醐寺・仁和寺・石山寺といった、定期的に寺宝が公開される寺院の図像を研究対象とした。図像だけでなく、文字情報として箱書きや極めといった伝来に関する情報も記録し、こうした情報を収集することで、例えば「唐本」と註記される図像の具体例が掴めるなど、仏画研究に資する図像データの集成を目指した。

（３）仏画研究への応用

白描図像の分析で得られたデータから帰納する仏画研究の実践をしていく。主題の分析だけでなく、表現や造形を視野に入れることで、多角的に図像と仏画の相関性を考察する。その際、既存の研究成果を積極的に活用する。そこで議論されている図像を再検証することで、新たな発見がある可能性が想定された。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

本研究で得られた成果は以下の４点である。

①玄証本について

現段階で判明する玄証本図像の総体をおおよそ捉えることが出来た。研究を進める過程で、玄証本における請来図像の占める割合が多いこと、玄証本が造形化された仏画や仏像に請来図像の影響が認められる作例があることが明らかとなった。

②玄証本の造形化について

「薬師十二神将像」（桜池院蔵）および「執金剛神像・深沙大将像」（金剛峯寺蔵）を例に、ともに玄証本が図像典拠となり重要な役割を果たしていたことは指摘されていたが、当時の玄証および高野山の状況を整理・分析したうえで玄証の具体的な関わりについて考察を行った。その結果、高野新別所を造営した重源と玄証の接点について、推定することが出来た。本事例は、白描図像を介した学侶、画僧、絵仏師／仏師の連携を考察する上で示唆に富む、重要な事例と思われる。

③白描図像と「鳥獣戯画」との関わりについて

2021 年に代表者の所属する東京国立博物館で開催された「特別展 国宝 鳥獣戯画のすべて」は、全四巻全場面が一挙に公開されたことにより、鳥獣戯画と白描図像の問題、とりわけ表現、描き手の問題について考察する重要な機会となった。また、会期中に行われたシンポジウムでは、主題・表現技法・修理の観点から鳥獣戯画が議論され、多角的な視点の知見を得ることができた。白描図像を白描画のなかでどのように位置づけるか、ひいては本画である仏画、あるいはやまと絵との表現技法との関わりについて考察する重要な契機となった。

④白描図像と近代模本について

東京国立博物館所蔵「阿弥陀鉤召図（模本）」は、法隆寺金堂壁画を模写したことが知られる桜井香雲が描いた近代の模本である。原本は高山寺伝来の鎌倉時代の白描図像とみられるが、中之島香雪美術館に所蔵される同一作例の模本との比較により、東京国立博物館所蔵の模本は、法隆寺に所蔵される江戸時代に制作された「阿弥陀鉤召図」の模本である可能性が高いことが明らかになった。

（２）得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

個々の作例ではなく玄証本に関する総合的な研究は、上述したようにほとんどなく、さらに、美術史学の観点から捉えたものは数少ない。しかし、一人の図像家に関わるまとまった白描図像が残されている点は重要で、収集の方針や方法について多くの情報を提供する。玄証本を起点に覚禅のような同時代の他の図像家の研究にも応用が可能である。また、表現の観点からの考察は、同時代の白描画を考えるうえで示唆に富む。とりわけ、「鳥獣戯画」の筆者問題のように、世俗画を描いていた絵師との違いを考察する点は、古代・中世絵画における描線の問題を考えるうえで重要である。また、白描図像そのものは断簡となって国内外の諸家に分蔵されており、その重要性が明らかとなることで、展覧会などでの積極的な公開が行われ、研究が進むことが期待される。

（３）今後の展望

現存作例を丹念に追うことで、白描図像と古代・中世仏画との関わりを具体的に考察する点である。対象を広げることで引き続き研究を進めていきたい。また、現存する図像には、かなりの割合で請来図像が含まれている。「唐本」と総称されるが、唐時代及び宋時代の図像に大別される。両者は図像だけでなく、表現においても違いがあり、それらを転写した図像にもその違いの痕跡が残されている。請来図像の需要について考察し、結果として仏画制作とどのように関わるのか、今後の課題としたい。

また、近年再評価が進む江戸時代に制作された仏画についても、白描図像との関りという視点は、図像の継承、あるいは変容について考察することができ、検討作例が増えることで、江戸時代の仏画の特色を示すことにつながると思われる。画僧・絵仏師に対する研究にも応用できる。さらには、東京国立博物館ほかに所蔵される近代の模本を活用した古代・中世の白描図像研究は、模本制作時の原本の状況を知ることができる格好の資料であり、今後の活用が期待できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 古川攝一	４．巻 －
２．論文標題 玄証本と請来図像	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宮治昭・肥田路美・板倉聖哲編『アジア仏教美術論集 東アジアⅦ（アジアの中の日本）』（中央公論美術出版）	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古川攝一	４．巻 －
２．論文標題 白描画としての鳥獣戯画―線描の妙技	５．発行年 2022年
３．雑誌名 土屋貴裕編著『鳥獣戯画研究の最前線』（東京美術）	６．最初と最後の頁 148-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古川攝一	４．巻 －
２．論文標題 白描図像の模写をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 創立150年記念特集『東京国立博物館の模写・模造―草創期の展示と研究―』図録（東京国立博物館）	６．最初と最後の頁 96-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 古川攝一	４．巻 第140号
２．論文標題 大和文華館所蔵「日吉山王宮曼荼羅図」について	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『大和文華』	６．最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川攝一	4．巻 —
2．論文標題 乙巻の馬はどこから来たのか－東アジアの馬比べ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 特別展『国宝 鳥獣戯画のすべて』図録	6．最初と最後の頁 244-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 古川攝一	4．巻 —
2．論文標題 酒井抱一が見た鳥獣戯画－MIHO MUSEUM断簡と抱一筆「鳥獣戯画写」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 特別展『国宝 鳥獣戯画のすべて』図録	6．最初と最後の頁 258-259
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 古川攝一	4．巻 —
2．論文標題 白描画としての鳥獣戯画－線描の妙技	5．発行年 2021年
3．雑誌名 特別展『国宝 鳥獣戯画のすべて』図録	6．最初と最後の頁 406-407
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 古川攝一	4．巻 —
2．論文標題 高山寺経蔵と白描図像－鳥獣戯画の移入をめぐって	5．発行年 2021年
3．雑誌名 特別展『国宝 鳥獣戯画のすべて』図録	6．最初と最後の頁 455-458
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 古川攝一	4．巻 －
2．論文標題 鳥獣戯画の筆致	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『時空旅人別冊 鳥獣戯画の世界』	6．最初と最後の頁 62-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川攝一	4．巻 －
2．論文標題 天台僧の入唐求法－天台山と五台山	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『伝教大師1200年大遠忌記念 特別展 最澄と天台宗のすべて』図録	6．最初と最後の頁 82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川攝一	4．巻 －
2．論文標題 智証大師円珍と園城寺（三井寺）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『伝教大師1200年大遠忌記念 特別展 最澄と天台宗のすべて』図録	6．最初と最後の頁 116-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川攝一	4．巻 －
2．論文標題 法華経の功徳と荘厳	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『伝教大師1200年大遠忌記念 特別展 最澄と天台宗のすべて』図録	6．最初と最後の頁 236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川攝一	4．巻 0
2．論文標題 仏画における画絹調査ー概要と展望ー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『絹織製作技術』	6．最初と最後の頁 78-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 古川攝一・吉田豊	4．巻 1495
2．論文標題 地蔵菩薩像（マニ像）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『国華』	6．最初と最後の頁 33-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 古川攝一
2．発表標題 醍醐寺の中世仏画
3．学会等名 基盤研究（B）「公武の信仰を統合した足利将軍家の宗教政策からみる室町時代の宗教絵画の包括的研究」（畑靖紀代表）研究会
4．発表年 2023年

1．発表者名 古川攝一
2．発表標題 模写から読み解けること―桜井香雲模「阿弥陀鉤召図」をめぐって―
3．学会等名 月例講演会「東博150年の歴史と模写・模造」
4．発表年 2022年

１．発表者名 古川攝一
２．発表標題 白描画としての鳥獣戯画ー線描の妙技ー
３．学会等名 令和3年度 東京国立博物館連続講座「鳥獣戯画研究の最前線」
４．発表年 2021年

１．発表者名 古川攝一
２．発表標題 大和文華館仏教美術コレクション再考―十五鬼神図巻と日吉曼荼羅―
３．学会等名 大和文華館「祈りと救いの仏教美術展」特別講演（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 古川攝一
２．発表標題 白描図像―祈りと魂の描線―
３．学会等名 東京国立博物館オンライン月例講演会
４．発表年 2021年

１．発表者名 古川攝一
２．発表標題 密教図像の動物たち
３．学会等名 奈良国立博物館第48回夏期講座「仏教美術にみる動物のすがた」（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

東京国立博物館オンライン月例講演会 https://www.youtube.com/watch?v=yUxZ_eS3zZ8

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関